20 毛糸のセーター

アイルランドの西部、ゴルウェー湾の沖に浮かぶアラン島は、不思議な雰囲気をもった島だ。今でも土地の人は、ふだんはアイルランド語で話す。馬車が主要な交通機関の、昔の面影をとどめた別世界だ。

アラン島は、独特の模様をもつセーターで知られる。古代のケルト文様が、言葉と同じように、セーターの形でこの島に生き続けているのだろうか。脂分を抜かず、染めもしない、やわらかなクリーム色のセーターは、着ていると、あちこちでアランセーターですね、と声をかけられる。

今でこそ、観光で少しは豊かになってきたが、もともとは、貧しくきびしい土地だった。島の人たちの生計は、おもに漁業で、海を見おろす丘の上には、藻屑と消えて帰らない人たちの、慰霊の碑が立っている。漁に出た夫の無事を、妻たちはいつも祈っていたのだろう。アランセーターは、そうした男たちが身につけていた、働く者の上着なのだ。

女たちは、心をこめて、セーターを編んだ。古くから伝わる模様は、ただの飾りではなく、着る人を護る、特殊な力をもっていた。古代の模様は、多かれ少なかれ、そうした精神世界を反映したものだ。荒海に投げ出された人間の、命を救うことができるのは、最後は神の力でしかないということだろう。そして、不幸にして神の力が及ばず、遺体が岸に打ち寄せられたとき、傷みきった体から自分の夫であると確認できるものは、その手で編んだセーターだ。アランセーターの模様は、それぞれの家で独特のパターンが決まっていた。

話はイギリスにもどるが、リーズから北に１時間ほど車を走らせると、ポットホール農場に着く。ヨークシャー北部の、比較的高い丘陵地帯のなかにあり、自然がよく残っている土地だ。道を少し間違えて細い田舎道を通っていたら、あちこちからキジが出てきて、ついに最後にはキジの群に道をふさがれて、立ち往生してしまった。こんなに多くのキジに出会ったのは、もちろん生まれてはじめてだ。

この農場には、見慣れない羊がたくさん飼われている。りっぱな角が４本ある羊や、全身が焦げ茶色の小柄な羊など、色も顔つきもさまざまだ。この農場

は、イギリスのあちこちの島などに生き続けてきた、伝統的な品種の羊を集めている。スコットランドの北のシェトランドやオークニーをはじめ、ヘブリデス諸島やマン島の羊がいる。セント・キルダのソイは、残念ながら飼われていない。あまりにも毛が短くて商品化できず、飼うのをやめてしまったということだ。

海から帰らぬ人びとを祀る十字架

(著作権フリー)

もちろん、伝統的な品種を守るというだけでなく、セーターをはじめ、自然の色合いの毛織物などを製作･販売している。ここでセーターなどを買うと、それぞれの種類の羊の説明書がついてくる。たとえば、オークニーの羊は、過酷な冬と短い夏を、海草を食べて生きのびてきたとか、ヘブリデスの羊は、黒くて４本の角をもち、毛糸は丈夫で長持ちし、よく似た毛糸が古代の墓から出土しているとか、由来がわかっておもしろい。

この農場からは、実は日本にもかなりセーターが輸出されているらしい。日本人の女の子向けの製品は、いろいろ注文がむずかしいようだが、はたしてそれを着る人たちは、こうした背景を知っているのだろうか。実は、先に紹介したアランセーターも、日本では着ていてもだれも何ともいってくれない。どこにでもあるただのセーターで、類似品が大量生産されているのだ。しかたがないことかもしれないが、文化の伝統と切り離されて、値段だけの価値で売り買いがされているのは、とてもさびしい気がする。

1996　新納泉　　著作権フリー